

Center News

白鷗大学教職支援センター

Center for Cooperative Research and Development in School Education.
Faculty of Teaching Support, Hakuoh University.

第 1 号

(2023年3月31日発行)



センター内の自学フロアにおける学生たちの真剣なまなざし

目次

- 01 提言：教職支援センターの創設にあたっての期待
- 02 提言：新しいセンターはどんな役割を担ったらよいか
- 03 寄稿：教育学部授業参観と教職支援センター
- 04 寄稿：「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」に寄せて
- 05 寄稿：「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」を受講して
- 06 寄稿：教育実習生との指導交流から
- 07 報告：教育実習から学んだこと
- 08 報告：現職教員の成長を促す温かい学びの場
- 09 報告：教育実習カリキュラムの実践からみえてくるもの
- 10 報告：公立学校教員採用支援の取組
- 11 報告：はばたけ先生プロジェクト
- 12 報告：第1回教職課程の自己点検評価の実施について
- 13 報告：次年度へ向けた取組の紹介

● 提 言

教職支援センターの創設にあたっての期待

教育学部長 金 井 正

学校教育は、その中で指導する教員の質に負うところが多い、やはり「教育は人」で決まる。大学の教員養成の期間は4年間である。その中でいかに教育的資質能力の高い学生を育てていくか、これは教員養成課程を持つ大学の課題である。その解答の一つがこの教職支援センターの創設と今後の運営である。

また、教育として、学生を学校現場に送り出したら大学の役目は終わるのかということそうではない。大学の求められている現状には、地域への教育力の還元がある。そこで本学の教職支援センターは「教職を目指す諸君と既に教職に就いている諸君を支援します。」とすることをスローガンに挙げている。教育課題は年を追う毎に多くなる。私も教職について、45年が過ぎようとしているが、乗り越えてきた課題は数々ある。そして、これからの教育課題も既に見えるだけで、「GIGAスクール構想」、「Society 5.0時代の教育」、「SDGs下での教育」、「ビッグデータの活用」、「データサイエンス」はもちろん、いじめの解消、暴力の解消、不登校問題の解決、障害児発達支援、人権教育、命の教育、実践的な英語力の強化、コミュニケーション力の育成、対話による深い学び、等々数えればきりが無い。しかし、これらの課題解決に向けて大学教育が学校現場の教員や教育に興味のある方々に提供できるものが数多くある。

更に、教員免許更新制の発展的解消及び教員研修の高度化により、「学び続ける教師」としての学びの場の確保の必要性が増している。今後、現場の教員に向けた学びの場の提供として、本学の教職支援センターの活動を進めることが必要である。また、学校、教育委員会等と本学が連携した学びの場の設営も大変重要で、一定の水準まで学校の求められている課題を解決するには、一定水準までの力を備えた教員と組織、組織のレジリエンスを高めることが必要である。そういった教員と組織を育てるために本学の教職支援センターの運営が必要である。

中央教員審議会から令和4年12月19日に出された、『令和の日本型学校教育』を担う、教師の養成・採用・研修について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する筆の高い教職集団の形成～』で述べられているが、文部科学省が、令和4年8月31日に示した方針である、教師に共通的に求められる資質能力を、①教職に必要な素養、②学習指導、③生徒指導、④特別な配慮や支援を必要とする子供への対応、⑤ICTや情報・教育データの利活用の5つの柱であることを明確にしている。更に、「新たな教師の学びの姿」をより高度な形で実現するためには、教育委員会等が実施する研修だけでなく、大学や民間事業者等が提供するプログラムも含めて、以下の「3つの仕組み」を一体的に構築する具体的構想が必要である旨を確認している。

- ① 明確な到達目標が設定され、到達目標に沿った内容を備えている質の高いものとなるように、学習コンテンツの質保証を行う仕組み
- ② 学習コンテンツ全体を見渡して、ワンストップ的に情報を集約しつつ、適切に整理・提供するプラットフォームのような仕組み
- ③ 学びの成果を可視化するため、個別のテーマを体系的に学んだことを、全国的な観点から質が保証されたものとして証明する仕組み

この中央教育審議会答申を受けて、本学でも教師の資質能力育成の更なる具現化を図ると共に教育委員会が行う研修と大学が行う研修という区分を適宜取り払い教育委員会と大学が連携し、小・中・高等学校教育を直接担う教員の研修に取り組んでいく必要性を強く感じる。それを実現する仕組みとして本学の「教職支援センター」の役割は重要である。

● 提 言

新しいセンターはどんな役割を担ったらよいか

教職支援センター長 黒羽正見

今日の大学教育において、教員養成課程をもつ大学は教員養成だけでなく、地域の教育力の向上と教育課題の解決に寄与することが強く求められています。私たちも「地域と共に歩む教員養成」という視点を取り入れながら、「実践的指導力と高度な専門性を兼ね備えた教員をめざす教職課程—学校現場往還型カリキュラム」を体系化し、今日まで地道に取り組んで参りました。そして、令和4年4月の改組による教職支援センターの下で、さまざまな活動が相互に結び合わされ、同センターは改めて、「教育実践に関する臨床の学の創出」とその成果を踏まえて、教育職員の養成・採用・研修などの教育指導・支援に関わる総合センターとして再出発をしました。

当センターは、経営学部、法学部、教育学部の3学部が、他の教育関係諸機関や地域社会と連携しながら、教職課程における教育職員の養成・研修などの総合的な教育指導・支援を行っています。そして、全学的な教職課程のマネジメント及び、教員研修を推進していく教育研究施設も兼ねています。さらに、現代の教育課題に対応していくために、今までの各部門の機能を調整・連携して、大学教育を支え、地域の教育に今まで以上に貢献するために、実習指導部門、教職支援部門、教育課程開発部門の3部門により統合しました。

このような基本認識を踏まえた上で、本学が個性豊かで教育実践力をもった教員の育成をめざすとき、教員養成や現職教員の再教育の中心となり、その核になるのが、本学の教職支援センターです。それを具体的に言えば、「児童生徒の心身の悩みに対応できるカウンセリング力をもった教員」「実践的で高い見識にたつ教員」「豊かな教育技術を身につけた教員」などが期待されてきます。そして、その目的達成のために、本学は広く門戸を開け、知を惜しみなく提供し、協力しながら大学教員と現場教師を結ぶ大きなパイプ役を積極的に果たしていくつもりです。地域が大学を大いに利用・活用し、大学教員も地域からたくさんのもので得ていく、その「かかわり合い」の中にこそ、本当の意味で教職支援センターの存在意義があると考えます。

「大学は敷居がどうも高く」という言葉をよく耳にします。いろいろと聞きたいし、力になって欲しいのだけれど、どうもとっつきが悪いらしいです。誤解を恐れず言わせていただければ、それは大学の教員が、地域から何か言ってくるのを待っているのみで、積極的にこちらから地域に出かけていかず、地域への働きかけが少ないからではないでしょうか。もしこちらから先に温かい言葉をかけるならば、どんなにか地域の人たちが話しやすく、相談しやすくなるにちがひありません。

センターの年報も他大学では、現場教師のために、実践報告形式で自由に投稿できる領域を設けているところもあります。学校の多くの仲間と各学校でまとめをすることは多いです。しかし、一人でどここの学校に行っても追究できるテーマを持ち研究をする体制にはなっていないのが現実です。教師が自分の実践を冷静にみつめ、そこから何か新しいものを創り上げていくことは、大変ですが大事なことであり、その教師の一生の核になるものです。そして、何よりも実践から学べる「実践学」を構築していく、その間に入り、教師の願いを叶えるべく支援していく、そんなセンターになったらいいなと思う今日この頃です。

● 提 言

教育学部授業参観と教職支援センター

教育学部FD委員会 柵 瀬 宏 平

白鷗大学教育学部では、FD活動の一環として、2022年度後期授業期間中、11月21日から1月27日にかけて、教育学部教員が相互に授業を参観する互見授業を実施した。また、各教員は、授業参観終了後、参観報告シートを作成し、参観した授業を実施した教員および教務課に提出した。

今年度の授業参観は、準備のための期間が比較的短かったこともあり、教育学部の全教員の参加には至らなかったものの、学部所属の専任教員54名のうち、24パーセントにあたる13名の教員から参加報告を得ることができた。今後は、授業公開の方式や期間を再検討するとともに、授業参観制度について引き続き周知徹底することで、より多くの教員に参加いただけるような仕組みを作っていきたい。

各教員に提出いただいた参加報告書においては、授業参観を通じて、授業内容のみならず、授業運営の方法や授業資料の作成方法といった点においても大きな刺激を受けたという感想が多く見られた。私も授業参観を通じて、学生とのコミュニケーションの取り方など、今後自身の授業に活かすことができるような多くの学びを得た。また、私自身の授業を参観いただいた教員から提出された参加報告書を読むことで、自身の授業運営について、他者の視点を通じて客観的に反省するという貴重な機会を得ることができた。

さて、白鷗大学では2022年4月より、教職課程における教育職員の養成・研修などの総合的な教育指導・支援を行うとともに、全学的な教職課程のマネジメントならびに教員研修を円滑に実施することを目的として、教職支援センターが発足した。教職支援センターは全学的な組織だが、多くの学生が教職課程に登録するとともに、多くの教員が、教科に関する科目も含む、教職関連科目を担当している教育学部は、教職支援センターととりわけ密接な関わりを持っている。実際、今回実施された授業参観においても、公開された授業のうち、少なからぬものが教職関連科目であった。

それゆえ、授業参観制度を通じて、各教員が他の教員たちからより良い授業運営のヒントを得るとともに、自身の授業について客観的に反省する機会を得ることは、教職支援センターが目的としている、教職課程に関わる教員の資質向上にも大いに寄与するものと思われる。また授業参観制度を通じた教育学部教員の資質向上は、教育学部学生の学修の質を高めることに直接つながっている。とりわけ、小学校や中学校、高校の教員となることを志望して、教職課程に登録している学生たちは、授業参観から得られた知見を活用して、より良いものとなった教育学部教員の授業を履修することで、自身が将来教職に就いた際に模範とするべき理想的な授業運営のあり方について具体的なヴィジョンを描くことができるようになるだろう。こうした観点からも、白鷗大学教育学部では、多くの学生と教員が教職課程に関わっているという、教育学部ならではの特性を視野に入れながら、教職支援センターとも連携しつつ、来年度以降も授業参観制度の充実を図っていきたい。

● 寄稿

「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」に寄せて

日本大学 田中 謙

はじめに

今回の寄稿は白鷗大学教職支援センター「現代的学校教育課題解決シリーズ 学び続ける教師のための教員研修リレー講座」での講師依頼を受け、その機会を得たものである。教職支援センター長の黒羽正見教授、同副センター長上野耕史教授を始め、白鷗大学関係者の方々に感謝申し上げる。

その上で、筆者が2022年度に担当した講座テーマ「小中学校における特別支援教育―校内支援体制整備の視座から―」に関連して、地域における教育臨床研究・実践と教員研修について私見を示すこととしたい。

「令和の日本型学校教育」と特別ニーズ教育

2021（令和3）年1月26日中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」では、「多様な子供一人一人の資質・能力の育成に向けた個別最適な学び」の実現を目指し、「新時代の特別支援教育の在り方」の中では「通常の学級においては、ユニバーサルデザインや合理的配慮の提供を前提とする学級経営・授業づくりを引き続き進めていく必要がある」と指摘されている。そのため、中教審の指摘を本講座の趣旨に結びつければ、通常の学級における学級経営・授業づくりの充実を図ることが、令和の日本型学校教育の構築に向けた「現代的学校教育課題」の解決の一方策となると考えられる。

答申では、学級経営・授業づくりの充実のキーワードが特別支援教育の視点からユニバーサルデザイン、合理的配慮の提供と例示されている。しかしながら、この両者は特別支援教育の充実を図るために強調して例示されているという意図は推測できるものの、特別支援教育の文脈ではなく、むしろ通常の学級における教科教育をはじめとする授業実践や生活指導／生徒指導実践の充実を図るため文脈で強調されることが望ましいキーワードである。そのため、特別支援教育が焦点化する「障害のある子ども」ではなく「すべての子ども」に着眼し、通常の学級での学級経営・授業づくりをユニバーサルデザイン、合理的配慮の提供等を含め、一人ひとりの特別ニーズに応じた「個別最適な学び」を実現するための特別ニーズ教育からとらえ直し、教育臨床研究・実践を推し進めていく必要性を提起したい。例えば授業研究の中で単元構想や授業デザイン、発問構成や教材研究等の手立てを問い、省察を深める中でユニバーサルデザイン、合理的配慮の提供も併せて問い、省察を深めるのである。

「すべての子ども」の教育の充実につながる教育臨床研究・実践

このような教育臨床研究・実践を推し進めていくための授業研究では、例えば公開授業・協議会を教科ごとに開催する場合に、教育方法や教科教育等の研究者、実践家とともに特別ニーズ教育の研究者、実践家も参画し、協働的に授業研究を推し進める組織体制や文化を構築していきたい。また教員研修や講義・講座等では、通常の学級での実践を例に、発問や教材が特別ニーズのある子どもにどのように映りやすいのか、子ども同士の学びの支え合いを創り出す学習環境はどのように構築できるのか等をより積極的に情報提供したり、フロアと共同討議できたりするようなデザインを検討したい。その際、参加者も教員のみならず、SC、SSW、ALT等の専門職や学校事務職員等カリキュラムマネジメントに携わる多様な対象に広げ、協働を促したいと考える。

上述のような教員研修は、容易に実現するものではない。しかしながら、この白鷗大学教職支援センターのリレー講座ではその第一歩を踏みだせるのではないかと期待しており、筆者自身も研鑽に努めたいと考える。

● 寄稿

「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」を受講して

行方市教育委員会 小沼優子

参加のきっかけ

小学校のときの恩師、現在は白鷗大学 教授 黒羽正見先生から「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」のことを伺いました。黒羽先生とは、私が教員になってからも時には温かな言葉を、また時には叱咤激励を、今では教員である前に人としてどうあるべきかを折に触れて教えていただいています。黒羽先生からのお誘いにすぐに白鷗大学のホームページから講座の内容を拝見させていただき、今日の教育課題、そして今私が知りたいと思う情報ばかりの講座に、すぐに受講を決めました。コロナ禍になりオンライン研修は多数あり、私もずいぶん参加してきました。しかし、この白鷗大学の講座は、90分という参加しやすい時間設定のほか、著名な講師の方々にもかかわらず受講料は無料。学び手の側に立った企画運営に驚きしかありませんでした。私はオンラインでの参加でしたが、モニター越しに对面で参加されている方々、私と同じようにオンラインで参加されている方々と一緒に学ぶことは、「ともにこれからの教育を考える仲間」という感覚でした。

学ぶことでの自問自答

「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」全8回を受講して、今思うことは貴重な学びの場を提供いただいたことへの感謝の気持ち、そして次年度の開講の待ち遠しさです。約半年の間に、毎回密度の濃い講話をいただきました。ありがとうございました。すべての講座を終えた今、講師の方々から現在、かつこれからの教育活動に対していくつかの問いを投げかけていただいたように感じています。

第一は、「あなたは、本当の意味で目の前の子どものために教育活動を行っていますか。」という問いです。「本当の意味」を言い換えるとすれば、相手意識です。学校には、さまざまな背景をもつ子どもがいます。安全、安心した家庭環境で過ごしている子どももいればそうでない子どももいます。教師として、一人一人の子どもが感じている気持ちを理解し、よりよくなりたいと願う子どもの気持ちを守ることを、見失ってはいけないと強く感じました。私たち教師は、学校があるから教師でいられるわけではありません。子どもがいるから教師として存在価値があると感じています。

第二に、「あなたの行っている教育活動の目的は何ですか。そして、その目的を意識していますか。」という問いです。学校教育は、学力向上、不登校対策、GIGAスクール構想、特別支援教育など、これからの社会を見ずえた教育活動のアップデートの真っ最中です。そのほかにも保護者からの相談、子どもの事故などの対応もあります。一つ一つの教育活動の目的や意義を見失ってしまうことがあるかもしれません。そのようなとき、本講座を受講し、自分自身の毎日を冷静に振り返り、何のために行っているかという目的を再確認することができました。

最後に、「あなたは、なぜ教師を続けているのですか」という問いです。これは、とても大きな問いでした。私が教師を続けているのは、子どもの未来に関われるからと再認識しました。教師として経験を増すごとにその思いは強くなっています。子どものために自分の感性や指導力を磨き、広い視野で、さまざまな分野を学びたいと感じました。

結びに

現在、私は指導主事として勤務し、先生方を支える立場にあります。指導主事の果たす役割は幅広く、教科等の指導、生徒指導、特別支援教育、教育課程の編成など学校教育全体において専門性が問われる毎日です。また、先生方のニーズに応じた具体的な助言も求められます。だからこそ、私は学び続けています。指導主事としての資質・能力を高めることが、先生方のため、学校のため、最終的には子どものためになると考えているからです。最後になりましたが、全8回の講座はあっという間に過ぎていきました。講座が開催される週末の午後が待ち遠しかったことを思い出します。講師の方々の著者やご紹介いただいた資料は、私自身の学びを広げ、続けることにもつながりました。このような機会をいただきましたことに、本当にありがとうございました。本講座に関わった方々へ深く感謝いたします。もし次年度も講座がありましたら、ぜひ参加したいと思います。

● 寄稿

教育実習生との指導交流から

○教育実習生の夢の実現に向けて

古河市立八俣小学校教諭 塚原尚子

教員として、子供達の前に立つということは、責任が伴います。生半可な気持ちでは、決して務まるものではありません。しかし、最初から自信のある人はいません。そのため、4週間の教育実習では、実際に教育現場を経験し、教職の道に進むかどうか、自分自身と向き合い、自分の可能性（視野）を広げ、成長するチャンスだと捉えたとともに、感謝の気持ちと謙虚な姿勢でチャレンジしてほしいと思います。

今回、私は、教育実習生に「将来、教職を目指しますか。」という質問をしました。教育実習生は、コロナ禍による大学生活への不安や将来、教職を志すことへの迷いなど、素直に話をしてくれました。その教育実習生の想いを実現するために、何を身に付けさせるか、そのために何が出来るかを念頭に指導内容を考えました。教育現場は、一人一人個性豊かな子供達が相手です。教え、育てるということは、授業が基本になりますが、それ以外の対応を求められることがたくさんあります。様々な状況を想定することで、勇気をもって次の一歩が踏み出せるよう、教育実習生には、時に厳しく、時に寄り添いながら、分かりやすく指導することを心がけました。

教育実習最終日、ささやかながら、教育実習生とのお別れ会を企画しました。教育実習生だけでなく、そこにいた子供達が、別れを惜しみ、大粒の涙を流していました。これは、教育実習生が、子供達と真摯に向き合ってくれた証であるとともに、子供達にとっても、かけがえのない大切な時間になったと実感しました。

最後に、教育実習後、一通の手紙が届きました。そこには、教職に対する夢や希望に満ち溢れた熱い想いが綴られていました。教育実習生は、近い将来、教員として教育現場に戻ってくることでしょう。その際には、自信をもって教壇に立ち、目の前にいる子供達を笑顔でいっぱいしてくれることを楽しみにしています。

○教員を目指す皆さんへ

白鷗大学発達科学部発達科学科スポーツ健康専攻卒
大田原市立奥沢小学校教諭

成瀬 瞬

私が教員として現場で勤めるようになって、学生時代の恩師と再会することがありました。恩師から「教え子が教員になってくれることは嬉しい」と言われましたが、当時の私にはその言葉の意味がよく理解できませんでした。これまでに担当した教育実習生の内の一人が先生となり、実習時に「何が出来るか」、「何を経験してもらおうか」を考え、最後まで教育実習生に寄り添ったことを思い出しました。同じ教師という立場になり、「実習が教員になりたい気持ちを強くしました。」という言葉をもらい、自分の行動は正解だったのかもしれないと思いながら、前述の恩師の言葉の意味がやっと理解できたような気がしました。

今年度、白鷗大学から教育実習生を迎え、初週こそ見学が多かったものの、「何が出来るか」、「いかに経験してもらえるか」を考え、どんどん取り組んでももらいました。授業はもちろん、課題の確認や児童との接し方、個別の支援など、可能な限り取り組んでもらい、最後は児童が計画したサプライズで送り出すことができました。今回、実習生の一生懸命に取り組む姿を間近で見ると、私自身もたくさんの刺激を受け、学びを深める事ができました。私の取り組みが正解であったかどうかは定かではありませんが、今回の経験で実習生が少しでも「教員になりたい」という気持ちを強くするきっかけになってくれたらいいと思います。

今の私は、学生時代の経験が基礎になっています。夢中になった部活動、必死に取り組んだ勉強、そしてたくさんの人とのつながり。その全てが財産であり、教員としての核になっています。また、教員は児童生徒の二度とない時間を共有することのできる唯一の仕事だと思います。だからこそ、限られた時間をどのように有効に使うのが大切になると思います。何事も行動しなければ変化もなく、繋がりも生まれません。だからこそ、学生の皆さんには今のうちに、「トライ・アンド・エラー」の気持ちで多くのことを経験して、人間として魅力あふれる教員になってほしいと思います。わたしも皆さんに負けずに、常に学ぶ姿勢で頑張っていきたいです。

● 寄稿

教育実習から学んだこと

○子どもたちと一緒に学び続ける「教師」の大切さ

英語教育専攻3年 鈴木 宏 駿

実習校：山形市立第二中学校

母校での教育実習では、指導教諭、そして配属クラスの生徒たちに支えられて、充実した3週間を送ることができました。この教育実習を通して学んだことは、教師として「学び続ける」ことの大切さです。実習をはじめて最初の二週間は、様々な先生方の授業を参観しましたが、それぞれの先生方で、教え方や生徒とのコミュニケーションの取り方などが異なっていました。その一方で、それぞれの先生方に共通していたことは、常に目の前の生徒のことを考えたカリキュラム実践を行っていたことです。教科担任制である中学校において、異なるクラスの組織文化を受け止め、生徒それぞれが安心できる、主体的に取り組めるカリキュラム実践を行うことは生徒理解の視点において大切だと感じました。三週目から実際に授業を行いました。最初は様々な生徒への対応に焦ってしまい、円滑な授業ができませんでした。私は毎授業後の指導教諭との事後反省会に加え、生徒たちに授業に対する評価を行ってもらい、良かった点、改善点を書いてもらいました。これらの生徒たちのフィードバックが自身の授業改善だけでなく、一人一人の生徒を理解する上で非常に役立ちました。常に生徒たちとの「対話」を大切にしながら、生徒の声をカリキュラム実践に生かしていくこと、そしてよりよい授業を行うために日々努力し続けることの大切さを学ぶことができました。他にも、初めての授業づくりや生徒たちとの関わり方などにおいて大変なこともありましたが、「授業がわかりやすかった」「一緒に過ごせて楽しかった」という生徒からの言葉に勇気づけられました。そして、教師という仕事が、生徒と共に成長することのできる魅力ある職業であるということを感じたと同時に、教師になりたいという気持ちがより一層高まりました。どのような時でも、子どもたちと一緒に「学び続ける」姿勢を貫くことのできる教師を目指して研鑽していきたいです。

○笑顔ある未来の子どもを守る教師としての責任

児童教育専攻3年 関 明香里

実習校：古河市立八俣小学校

私にとって4週間の実習は、あっという間でした。実習校の皆さんに支えられ、充実した日々を送ることができたからです。これ以上ない環境を整えて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。実習を振り返ると、自分の甘さを痛感し、反省と改善を繰り返す毎日でした。実際の教育現場は、想像以上のものであり、教師になりたいという気持ちだけでは教師になることはできないと感じました。思うようにいかず悩むこともありましたが、児童が一生懸命勉強している姿を見ると、自分も頑張ろうと思うことができ、失敗を恐れず挑戦する実習にしようと思い決めました。改めて、教師は、児童ありきの職業であることを実感し、児童から学び支えられ、児童と共に成長していくことのできる教師の魅力とやりがいを強く実感しました。1週目は、自分から関わるのが大切だと学びました。児童を知ろうとすること、理解しようとするので、児童との信頼関係を築くことができると分かりました。2週目は、授業をすることの大変さを感じました。ただ、指示説明したり机間指導したりしてしまい、授業のイメージや児童の実態を把握しきれていなかったと反省しました。教師の自覚と責任について、現実的に考えることができた瞬間でした。3週目は、授業をすることの大切さを感じました。指導案通りに進めてしまい、楽しく分かりやすい授業作りに苦戦しました。分からないと言える子もいれば言えない子もいます。個に応じた対応をしてこそ、児童がいきいきとした学校生活を送ることができると学びました。4週目は、教師になりたいという思いが教師になるという強い思いに変わりました。実習校の皆さんと笑って泣いて実習を終えることができたことが何より幸せでした。4週間の実習は、教師の基本が詰まりに詰まったものでした。私が感じたことは、基本的なことこそ、難しく大切だということです。この実習で学び経験したことを将来の糧として、日々学び成長し続けていきます。昨日よりも今日、今日よりも明日と、夢に向かって、頑張ります。

● 報 告

現職教員の成長を促す温かい学びの場 — 学び続ける教師のための教員研修リレー講座 —

教育課程開発部門

近年の学校や教職員を取り巻く環境は厳しいものとなり、現場の先生方には、さまざまな課題に対する早急な対応が求められていると思います。そこで、白鷗大学教職支援センターでは、本学を含む大学教員らがそれぞれの研究をもとに、現代的な課題についてわかりやすく講義する講座を開催することで、皆様に現代的学校教育課題を解決できる資質・能力を身につけていただきたいと考え、「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」を開催することとしました。

○令和4年度の実施内容

・ 期日・内容等

講座日	担当（専門分野）	講演題
第1回講座 6月11日(土)	常葉大学 教授/堀井 啓幸氏 (教育経営)	アクティブラーニングを生かす教育環境 — 教育空間と学習活動 —
第2回講座 6月25日(土)	上越教育大学 教授/稲垣 応顕氏 (学校教育臨床学)	コロナ禍におけるICT教育の功罪を考える — 教育カウンセリング心理学の視点から —
第3回講座 7月 2日(土)	東京学芸大学 教授/佐々木 幸寿氏 (教育行政学)	学校における法規の活用 — 最近の学校法の動向（著作権含む） —
第4回講座 7月23日(土)	群馬大学 教授/吉田 浩之氏 (生徒指導)	いじめの理解と対応 — 法、通知、事例に基づく最新動向 —
第5回講座 9月 3日(土)	富山大学 教授/笹田 茂樹氏 (教育行政学)	教員の働き方改革と「チーム学校」
第6回講座 9月17日(土)	日本大学 准教授/田中 謙氏 (障害児教育)	小中学校における特別支援教育 — 校内支援体制整備の視座から —
第7回講座 11月12日(土)	白鷗大学 准教授/森 好紳氏 (英語教育)	小学校英語教育の評価を考える — パフォーマンス評価の観点から —
第8回講座 11月26日(土)	白鷗大学 教授/上野 耕史氏 (情報教育)	GIGAスクール構想の先にある新しい学び — 文房具としての利用から自らの学びの最適化へ —

・ 参加者の状況（8回合計）

参加者数 503名（対面 386名 リモート 117名）
 参加者の所属等 学校関係 61%（小学校関係 44%，中学校関係 16%，高等学校関係 1%）
 行政関係 10%，学生 24%
 講演に関する感想 満足 68%，やや満足 20%，普通 10%

・ 参加者の声（一部）

現場の教師にとって即戦力となるような講座だと感じています。白鷗大学の姿勢に感謝しています。教育界は今、激動の中にあり、常に学び続けなければならないと思います。素晴らしい研修の機会 だと思っています。

参加者には、管理職や教育委員会関係者が多いように思いますが、経験の浅い、これからの教育を担う人たちが参加しやすいような、内容、形態で実施されると良いと思いました。参加者は少なくなるかもしれませんが、具体的な児童生徒指導や学習指導の実践的な学びなども講座の一つにあると良いかと思います。

○令和5年度に向けて

参加者いただいた皆様の感想などを参考に、次年度も皆様の期待に応えられるよう、講義内容を検討するとともに、講演に関わる意見交換などが充実するよう、実施方法等も検討していきたいと考えています。

詳細が決まりましたら白鷗大学のHPでお知らせします。ぜひ参加についてご検討ください。一緒に学び合いましょう！

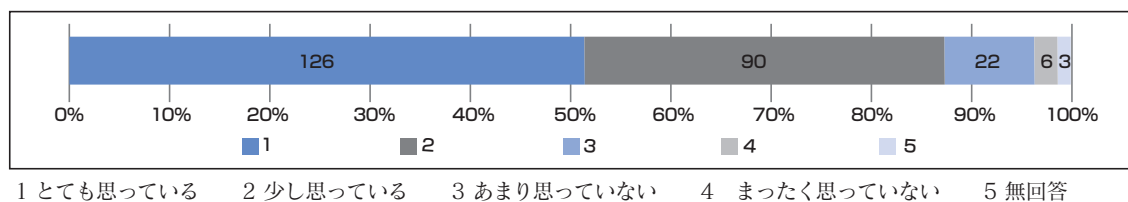
● 報 告

教育実習カリキュラムの実践からみえてくるもの

実習指導部門

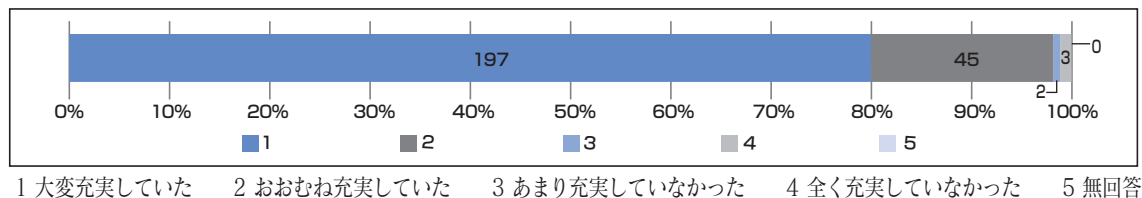
本学の教育実習は、栃木県教育委員会をはじめとする各県市町村教育委員会との緊密な連携の下、例年300校以上の実習校と共に教育実習を実施している点が一番の特色です。今年度も24都道府県379校の協力を得て、充実した教育実習を実施することができました。つきましては、教育実習関連のアンケート調査結果の分析・考察を述べ、教育実習校の諸先生方の多大なご協力とご理解に対するお礼に代えさせていただきたいと存じます。

【質問 1】 入学時の「学校の教員になりたい」と思う気持ちについて



学生へのアンケート調査結果（有効回答者数247名）で、質問1の「とても思っている」「少し思っている」の合計割合の数値が「87.4%」でした。教員をめざして本学に入学してくる学生たちは、これまでの学校生活の中で、必ずどこかで「意味ある他者（significant others）」としての「いい先生」に出会っています。そしてそれが、自分の理想とする教師像のモデルとなっていることが多いです。そう考えると、次の代の「いい先生」を育てるためにも、学生たちに直にかかわる我々大学教員と学校現場の先生方が、いかに教職への情熱を持ち、専門職としての力量を備え、人間としての魅力を持ち合わせているか、ということに尽きると思われます。

【質問2】 「主免許の教育実習」に関するあなたの充実度はどの程度でしたか



質問2の「大変充実していた」と「概ね充実していた」の合計割合の数値が、「98.0%」でした。また、充実していた点に関する学生の記述内容をカテゴリー化して、多い順から5項目を挙げてみると、「運営体制」「指導技術」「児童生徒との関係性」「実習生への接し方」「児童生徒理解」などが上位を占め、教育実習Ⅰ・Ⅱを通して、「教育実習生」としての自己理解を深め、教職キャリア形成を主体的に図っていることが推察できます。また、上位の「運営体制」や「指導技術」の記述内容をみると、「未来の子どもたちの教育を担う後輩を育てているんだ」という温かな気概をもって実習生を受け入れている学校組織集団の持っているパーソナリティの豊かさを基底にした「同僚性」や「協働性」の追求意欲の高さが読み取れます。さらには、今日の厳しい社会状況のなかでも、校長のリーダーシップの下、本学の教育実習を学校の同僚性や協働性を高め、組織の活性化を図る学校改善の一助と位置付け、ポジティブな組織文化を構築すべく努力している学校集団の存在を確認することもできました（詳細は教職支援センター年報、実習指導部門の取組を参照して下さい）。

◆まとめにかえて

実習後の学生一人一人の充実した理由の記述内容をみますと、教職が「安定した仕事だから」という経済的報酬よりも、「児童生徒の成長を感じる時」の精神的報酬によって支えられている職業であり、そして地道で粘り強い取り組みが重要であることを改めて確認することができます。どのように時代が変わろうとも、またどのようにマスコミが学校教育を吹聴しようとも、やはり日本の教師は「生徒の全人格に責任を持ち熱心に指導する」、まさしく「献身的な教師」像を持ち続けている存在なのです。

● 報 告

公立学校教員採用支援の取組

教職支援部門

今年度は、栃木県の小・中の募集が前年度までと比較して約3割減となったため、栃木県を志望する学生が多い本学としてはかなりの苦戦を強いられました。結果的には本学は1割5分減に収まりました。さらには、福島県・茨城県・新潟県で過去最高の現役合格を出すことができたので、全体では現役合格135と、昨年（133）を上回る過去最高を更新することができました。

○令和4年度の実績

・教採支援内容

- ① 全体ガイダンス 12月（先輩の話） 4月（出願） 6月（直前） 10月（臨採登録）
- ② セミナー 通年 一般教養 教職教養 専門教養 作文 面接 討論 場面指導 模擬授業
- ③ 説明会 栃木県教委 神奈川県教委 川崎市教委 福島県教委 茨城県教委

・数字

		小	中	高特	計			
2022年度	受験者数	157	42	高10特1	210	率	%	
	一次合数	130	26	高3特1	160	一合／全	76.2	小82.9 中63.4 高27.3
正規採用	二次合数	117	16 <small>(体7英8社1)</small>	高1特1	135	二合・全	64.4	小74.5 中38.1 高18.2
臨時採用	志望者数	現役の臨時採用はこれから調査						
	任用	年度末に判明予定						

・自治体別

令和4年度公立学校教員採用試験合格数（2022.12.15）

・新卒 135

栃木県66（小60 中英4 中社1 高国1） 福島県22（小19 中体3） 茨城県18（小10 中体4 中英4）
 新潟県7（小） 神奈川県4（小） 埼玉県4（小） 群馬県2（小） 川崎市2（小） 宮城県2（小） 東京都2（小1 特1）
 さいたま市1（小） 千葉県1（小） 山梨県1（小） 山形県1（小） 愛知県1（小） 青森県1（小）

・既卒 83 12/15現在

栃木県40（小30 中体6 特4） 福島県10（小8 中教科不明2） 茨城県6（小4 中社1 中体1）
 埼玉県6（小5 中教科不明1） 東京都4（小3 特1） 群馬県3（小1 中体1 特1） 宮城県3（小） 千葉県2（小）
 秋田県2（小1 中体1） 新潟市2（小） 新潟県1（小） 滋賀県1（小） 宮崎県1（小） 山形県2（小1 中体1）

○令和5年度に向けて

文科省主導の採用試験日程の前倒し案や東京都などの受験資格の変更など、国や各自自治体の教員採用試験の変更が多くなりそうです。学生にも情報収集を奨励し、早め早めの対応準備を進めていきたい。

● 報 告

はばたけ先生プロジェクト

教職支援部門

○これから教壇に立つ皆さんへ

令和5年3月1日に、4月から教壇に立つ学生のための事前研修「はばたけ先生プロジェクト」が、次の日程・内容の通り行われました。今回はセンターの初めての取組であり、同時に、茨城県の新任予定者研修が重なり、延べ参加人数は42名でしたが、参加学生一人ひとりの問題意識に支えられた、温かいつながりのある真摯な学び合いができました。

□ ねらい

4月から学校現場に初めて赴任する初任者教員を対象に、「最初の4月に求められる業務・教育活動」や「毎日繰り返す日課的な業務・教育活動」等に焦点を当てて、具体事例を通してその理解と準備に資する研修を実施し、教員人生をスタートする卒業生が、円滑に第一歩を踏み出し、軌道に乗ることができるように支援する。

□ 対象者

令和5年度より、学校現場で勤務する 本学の学部卒業予定の学生

□ 日時・内容

令和5年3月1日 10:40～11:40（全体研修）

	小学校向け	中・高向け
10:30 受付	351教室	361教室
10:40 講話60分程度。勇気とやる気を起こさせ、背中を押す内容	教職支援室アドバイザー ○4月から教職へ就くみなさんへ	教職支援室アドバイザー ○新年度から「教師」となるあなたへ
11:40 質疑応答		

□ 学生からの感想

- ・共にセミナーで学び、採用試験を受け、これから教壇に立とうという仲間と最後の学びで集まれ、決意を新たにできたのは良かった。
- ・お話の中で授業参観の様子を語る場面があった。「親の目は自分の子どもを見ている」という点が分かる写真があり、親にとって大切なわが子は自分の目の前にいる子どもたちなのだ改めて考えることができた。
- ・先生の教員時代の話を聞き、何年経っても担任した子どもたちやエピソードは忘れることなく、それは子どもたちも同じように覚えていることなのだと感じた。子どもたちにとっての一度きりの1年を任される責任とそれを楽しみ、存分に味わいながら誠実に向き合っていきたい。



□ 今後の展望として

事前にあまり先入観を持たせない柔軟なアドバイスに心がけていたが、現場で新人を何人も指導してきた管理職経験豊富な講師陣の言葉は、学生たちの心に響き、最終メッセージに相応しいものになっていました。今後は、教職支援センターWebサイト等により、教員としてスタートした後も、教員生活が軌道に乗るように相談活動、後押し活動を行い、卒業生を支援できる教職支援ネットワークの窓口一つとなるように努めていきたい。

● 報 告

第1回教職課程の自己点検評価の実施について

教育課程開発部門

令和4年4月1日から、教員養成教育の質の維持・向上を目的に、開放性の教職課程を設置する全大学に対して、全学的な組織体制の充実及び当該組織による教職課程の自己点検評価が義務付けられることになった。これを受けて、本学も同年4月に全学的な組織体制としての教職支援センターを設置し、本学の教職課程を3基準領域・6基準項目に基づく31観点から自己点検評価し、報告書を作成した。ここでは、報告書作成のプロセス、本学の教職課程の主な評価できる点と共通理解を図るべき作業課題について述べることにする。

1 報告書作成のプロセス

5月に教職支援センターを中心に自己点検評価計画の原案を作成し、センター運営委員会の承認を経て、8月の夏季休業日から、本学の実施方針に基づき、全学委員会組織の各担当委員会に、3基準領域6基準項目の31観点を教職課程の自己点検評価シートを割り振った。その後、夏季休業終了後の9月末に評価シートを回収して、教職支援センター作業部会委員を中心に、点検・整理票に基づき、評価シートの吟味・検討を行い、修正後に自己点検評価報告書を作成した。教員が日々教職課程のカリキュラム実践する際は、以下の基準領域は重要である。

○基準領域1：教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

・教職課程教育に対する目的・目標の共有（3観点） / ・教職課程に関する組織的工夫（6観点）

○基準領域2：学生の確保・指導・キャリア支援

・教職を担うべき適切な人材（学生）の確保・育成（4観点） / ・教職へのキャリア支援（5観点）

○基準領域3：適切な教職課程カリキュラム

・教職課程のカリキュラムの編成・実施（8観点） / ・実践的指導力養成と地域との連携（5観点）

2 教職課程の主な評価できる点

本学の正規合格数は年々増加し、直近5年間の教員就職志望者数は200名強で推移し、不合格者も95%以上が臨時的任用に就いている。そこで上述の共通認識を踏まえ、主な評価できる点について、次の3点を提示したい。第一は、本学の教職課程で学ぶにふさわしい学生を、「入学者受け入れの方針」等を踏まえて募集し、入学者選抜を実施している点である。入学者選抜実施の基本が「個性の尊重」「学習機会の保障」という二つの原則に則り、多様な選抜方法により、どのような境遇や背景を持つ学生に対しても大学での学習機会を保障するために経済的支援に配慮した入学者選抜を実施している。

第二は、学生のニーズや適性の把握に基づいた適切なキャリア支援を組織的に行っている点である。教員採用のノウハウを知り尽くした実務経験豊富な教員による教採ガイダンス・教採セミナーを通年展開し、採用試験や教員就職に向けた実際的な支援を行っている。

第三は、教職支援センター等と教育実習協力校とが教育実習の充実を図るための緊密な連携を図っている点である。本学の教育実習校との連携は、北は北海道、南は沖縄・九州に至る20都道府県以上の各市町村教育管内350校以上の小・中・高等学校の母校実習を基本とし、体系的教育実習カリキュラム実践が充実している。

3 共通理解すべき主な作業課題（第1回作業からみえてくるもの）

- (1) 31観点を評価シートを割り当てる各担当委員会の選定と協働作業にズレが生じないように工夫する。
- (2) 現状説明、長所・特色、課題から評価する際の根拠資料・データ等の所在場所を明確にしておく。
- (3) 評価シートの記述の仕方を評価シートの作成例に基づき、ポイントを詳細に明記して提示する。

● 報 告

次年度へ向けた取組の紹介

教育課程開発部門

令和5年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2023」の「学び続ける教師のための教員研修リレー講座」の事業内容が、下記の通り決まりました。リレー講座の詳細については各学校へ案内パンフレットを配布し、当センターのホームページでも掲載しています。多数の参加をお待ちしております。

2023 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び続ける教師のための教員研修リレー講座

講座日	担当/所属/専門分野	内 容
第1回講座 6月10日(土)	13:30～15:00〈東京学芸大学〉 佐々木 幸 寿 教 授/教育行政	学校における法規の活用 —最近の学校法・教育判例の動向と法的実践—
第2回講座 7月15日(土)	13:30～15:00〈白鷗大学〉 島埜内 恵 講 師/比較教育学	子どもの権利から見える <学校>と<教育>
第3回講座 8月26日(土)	13:30～15:00〈白鷗大学〉 北 山 修 学 長/臨床精神医学	ハブられても生き残るための深層心理学
第4回講座 9月23日(土)	13:30～15:00〈日本大学〉 田 中 謙 准教授/障害児教育	小中学校における通常学級での合理的配慮
第5回講座 10月 7日(土)	13:30～15:00〈金沢学院大学〉 多 田 孝 志 教 授/国際教育学	持続可能な社会の実現に向けた教育の変革の方向
第6回講座 11月25日(土)	13:30～15:00〈群馬大学〉 吉 田 浩 之 教 授/生徒指導	いじめの理解と対応 —法・通知・判例等に基づく最新動向—

■白鷗大学 2023年度 教職課程の自己点検評価の実施

本学の教職課程の運営にあたり、本学の教職課程の目的・目標に照らして、教育内容・方法および学修成果の状況などを検証し、絶えず教育の質保証の維持・向上に努める必要があります。教職支援センターでは、2022年の自己点検・評価シミュレーションを踏まえて、2023年度に本格実施する予定です。

■令和5年度初任者教員事前研修（通称：はばたけ先生プロジェクト）実施

4月から学校現場に初めて赴任する初任者教員を対象に、「最初の4月に求められる業務・教育活動」や「毎日繰り返す日課的な業務・教育活動」等に焦点を当てて、具体事例を通してその理解と準備に資する研修を実施し、教員人生をスタートする卒業生が、円滑に第一歩を踏み出し、軌道に乗ることができるよう支援します。

白鷗大学 教職支援センターニュース第1号

発行日：令和5（2023）年3月

発行所：白鷗大学教職支援センター

〒323-8585 栃木県小山市大行寺1117 FAX 0285-22-0800

E-mail：kyoshoku-center@ad.hakuoh.ac.jp